

方針ヲ定メ、帝國憲法上ノ手續ヲ執ルノ要アルニ付、我方トシテハ差當リ左記手順ニ依リ臨時總會ニ對スル帝國代表ノ引揚ヲ行フト共ニ、總會ノ採擇セル報告書ニ對シ第十五條第五項ニ基ク陳述書ヲ公表スベシ。

(イ) 引揚ノ時機ハ總會ニ於テ我方ノ立場ヲ宣明スル聲明ヲ爲シ、且報告書ノ採擇ニ對シ反對投票ヲ爲シタル上、即時之ヲ行フコト。

(ロ) 前記引揚ハ臨時總會閉會ニ伴フ當然ノ引揚ト同一視セラルニ於テハ、其政治的效果面白カラザルニ付、前項聲明中ニハ「總會ノ採擇セル報告書ハ我方ノ承認シ得ザルモノニシテ、茲ニ帝國政府ハ日支紛爭事件ニ關シ聯盟ト協力シ得ル限度ニ達シタルモノト認ムルト共ニ、帝國ト聯盟トハ東洋平和ノ確立ニ關係ル所信ヲ異ニセルコトヲ體得セリ」等ノ趣旨ヲ明示スルコト。

三、尙ホ愈々聯盟脱退ノ場合ニハ、之ニ伴フ内外機微ノ情勢ニ對シ特ニ慎重ノ考慮ヲ拂ヒ善處スルヲ要スルヲ以テ、既定ノ對滿方針ニ邁進スル一方、對支、對露其他歐米諸國トノ關係ニ於テハ努メテ公正ノ態度ヲ持シ、嚴ニ事端ノ發生ヲ避ケルト共ニ、一般的平和事業ニハ引續キ誠意ヲ以テ參與スルノ方針ヲ執リ、以テ脱退ニ伴フ内外ノ不安ヲ緩和スルニ努ムベク、而シテ右趣旨ヲ内外ニ徹底セシムル爲メ、嚴肅ニシテ適切ナル手段ヲ講ズベシ。

斯クノ如クシテ聯盟トノ關係ハ遂ニ決裂シタ、總會ニ於ケル經過ハ周知ノコト故之ヲ省略スルガ、我々ガ總會ヲ引揚タ二月二十四日ハ、筆者ガ去年日本ヲ立ツタ當日デ、滿一周年ノ今日今日聯盟ト絶縁スルニ至ツタノハ誠ニ奇縁デアル。

第十六章 日本聯盟脱退後ノ佛國ノ對日空氣

反日家「コメール」

昭和八年二月二十五日松岡代表ハ晝、筆者ハ夜ノ汽車デ壽府出發、巴里ニ歸ツタガ、佛國ノ「ボンクール」内閣ハ極メテ短命デ、一月三十一日「ダラヂエー」氏之ニ代ツタ、然シ「ボ」氏ハ依然トシテ外相ノ椅子ニ留マリ偶々同省ノ情報部長ガ病沒シタノデ、其後任ニ反日家「コメール」氏ヲ迎ヘ氏ノ爲メニ情報部ノ規模ヲ擴張シタ。「コメール」氏ハ熱河問題ニ付テモ又東支鐵道問題ニ付テモ、故意ニ事態ヲ誇張シタ惡宣傳ヲ爲シ、反日氣流ノ助成ニ努メタガ、五月九日ノ「ル・タン」紙社説ハ東支道鐵問題ニ關聯シテ日本ノ野心ヲ強調シ、西班牙殊ニ浦鹽ノ將來ニ對シテ極端ナ悲觀意見ヲ書キ立テタ、其内容ハ兩三日前筆者ガ「コメール」氏ノ頻リニ流布シ居ル所ナリトテ内聞シタモノト殆ンド同ジデ「ル・タン」ノ如キ大新聞ガ此様ナコトヲ書クト、佛國ノ知識階級ニ迄錯覺ヲ起サセル虞ガ萬々アルシ、又間接ニ「コ」氏ノ反省ヲ促ガス一助トモ成ルト考ヘタカラ「ル・タン」社ニ對シテ嚴談シタラ、編輯主任カラ夫ノ論説ハ自分ガ目ヲ通サナカツタモノデ誠ニ申譯ガナイ、論説主任ノ「ローラン・ド・マレース」氏ニハ篤ト申聞ケ、同人ハ「コメール」氏トハ睨憲ノ間柄デアルガ、今後日本關係ノ事項ニ付テハ決シテ「コ」氏ノ意見ヲ受ケ賣リセヌ様、嚴重ニ警告シタノ釋明ニ接シタ。「ローラン・ド・マレース」氏ハ白耳義人デ、日露戰爭時代ニハ白國ノ新聞社ニ居リ、隨

分日本ノ爲メニ成ツタ人デ、當時筆者ハ巴里ニ在勤シ其詳細ヲ知ツテ居ルガ、今度ノ日支事件ニ付テモ相當ノ理解ヲ持チ、其論説ハ今迄決シテ脱線シナカツタノニ、今回ノ如キ醜態ヲ演ジタノハ氏ノ爲メニ誠ニ遺憾デアル。其後「レーグ」海相ト一所ニ食事シタ時、談偶々「コメール」氏ノコトニ及ンダラ、海相ハ其存在ヲ有害無益ト云ハヌ許リノ態度ヲ示シタ。

佛國ノ對日空氣

然シナガラ悲觀スレバ左派ニ屬スモノヲ除キ、佛國ノ諸新聞ハ決シテ反日傾向ヲ帶ビテハ居ラス。佛國デ一番反日氣分ノ漲ツテ居ルノハ、曩ニ一言シタ如ク外務省デ、二月十五日ノ十九人委員會議事ガ日本ニ傳ハツタ時、東京及大阪ノ取引所ガ一時閉鎖サレタトノ報道ハ、是等外務省ノ連中ニ微少ナ印象ヲ與ヘ、聯盟ノ決議ニ從ヒ各國ガ少シデモ財政的壓迫ヲ加フレバ、日本ハ忽チ降服スルトノ感ヲ抱クニ至ツタトノ内報ニ接シタカラ、筆者ハ友人ニ旨ヲ含メテ「ボンクール」外相ノ意中ヲ探ラセタ所、同外相ハ日支事件ニ付テハ聯盟ノ小國ガ前例トナルノヲ虞レテ居ルコトガ問題ノ重點デ、小國側ハ飽迄規約ヲ擁護セムトスル一方、佛國トシテハ英國ノ態度ニ引摺ラレル點ガアル。然シ日佛關係ガ日支事件ノ爲メニ惡化スル様ナコトハ自分ノ欲シテ居ラス所ダカラ、總會ガ勸告ヲ採用シテモ、其遂行ノ爲メ直ニ強制手段ヲ取ルト云フガ如キコトハ考ヘテ居ラス、又假リニ日本ガ脱退ニ決シテモ、其效力ハ通告二年後ニ發生スルノデアルカラ、其間ニハ事ヲ纏メ得ル他ノ方法モアルコトト思フ、ト内話シタトノ報告ニ接シタ。之ニ付思ヒ出スノハ曾テ松岡代表ガ「ドラ

モンド」事務總長ト會見ノ際、話ガ脱退ノコトニ及ンダラ、事務總長ハ何モ脱退ノ正式通知ヲセズトモヨイデハナイカ、日支事件ノ解決スル迄聯盟ノ議事ニ參加セヌト通告スレバ、夫レデ充分デハナイカト云フタトノコトデアルガ、西班牙ノ「マダリヤガ」大使等ハ更ニ樂觀氣分デ、日本ハ今後日支事件ニ關スル限り議事ニ加ハラヌコトトシ、總會デモ理事會デモ此問題ガ起ツタ時丈ヶ退席スレバ、夫レデ差支ヘナイデハナイカト眞面目ニ筆者ニ助言シタコトガ屢々ダ。畢竟彼等ハ云ヒタイ事丈ヶ云フテシマヘバ、氣ガ濟ムノデ、考ヘ方ガ我々トハ根本的ニ相違シテ居ル。

帝國政府ガ聯盟對策最後ノ廟議ヲ決シタ二月二十日「レーグ」海相ハ日本ガ秩序ノ爲メニ立ツテ居ルコトニ付テハ自分達ハ何處迄モ之ヲ支持セネバナラヌ、聯盟ノ勸告ハ未ダ閣議ニ上リハセヌガ、若シ佛國ガ勸告ニ基イテ何等カノ措置ニ出デムトスル場合ニハ、必ラズ閣議ヲ經ネバナラスカラ、其時ニハ自分ハ勿論「サロー」「バガノン」等日本ノ立場ヲ支持スル諸大臣出デ、日本ニ對シテ強制手段ヲ取ルガ如キ決定ハ、到底成立ノ見込ハナイ、ト筆者ノ知友ニ内話シタトノコトダ。

屢々述ベタ通リ壽府ノ空氣ハ、必ズシモ同地ニ代表者ヲ出シテ居ル各國ノ輿論ヲ代表シテ居ルモノトハ云ヘヌ、勿論其多數ハ本國政府ノ訓令ヲ受ケテ行動シテ居ルニハ相違ナイガ、此等政府ノ方策ガ如何ナル程度迄輿論ノ支持ヲ得テ居ルカト云フコトハ全ク別問題デ、別問題デ政府トシテハ單ニ日支事件其モノニ對スル考察カラノミデナク、更ニ複雜ナ利害ノ見地カラ、其態度進退ヲ決スルコトガ尠ナクナイ故、日支事件ニ關スル聯盟決議ガ如何程ノ共鳴ヲ各國ノ輿論カラ受ケテ居ルカラト云フコトハ、此等ノ國ニ居テ親シク之ヲ研究

スル外ハナイ。筆者ガ巴里ニ歸ルト、壽府トハ全ク異ツタ空氣デ、非常ナ快感ヲ覺エタ。無論左黨ニ屬スル諸人ガ、政府ノ執ツタ態度ヲ支持スルノハ已ムヲ得ヌコトデアルガ、黨人タル資格ヲ離レテ交際スル時、其態度ニ全ク別人タル如キ觀アル者ガ尠ナクナイ。軍人ガ其陸軍タルト海軍タルトヲ問ハズ、帝國ノ決斷ト自信的政策ニ對シテ満腔ノ讚辭ヲ述べ、佛國當今ノ政治家ニ此氣概ナキヲ歎ズルハ、異口同音ナル處、上院外交委員長「アンリー・ペランジエー」氏モ筆者ニ對シ、當時進行中ノ熱河問題ヲ「モロツコ」討伐ニ比シ、口ヲ極メテ聯盟ノ有害無益ナコトヲ強調シタ。恰モ極東旅行ヲ終ヘテ巴里ニ歸ツタ「ピエール・リオーテイ」氏ガ三月十五日上院外交委員會デ極東時局ノ講和ヲシタガ、其印象ナリトテ語ル所ニ依レバ、列席ノ各員等シク佛國ガ從來ノ對日態度ヲ變更シタコトヲ大ナル過誤ト認メテ居ルモノノ様ダトノコトダ。更ラニ是レハ見様ニ依ツテハ些事デアルガ、蜂須賀侯爵カラ「ユニオン」俱樂部ニ入會シタイ故取運ンデ吳レトノ依頼ヲ受ケタノデ、筆者ハ壽府ヲ引揚テ歸ルト間モナク、推薦者ノ一人ト成リ入會投票ヲシテ貰ツタ、此俱樂部ニハ駐佛大公使ノ大部分ガ入會シテ居リ、巴里ノ俱樂部中デ最モ品ノ好イモノノツデアル、普通ノ場合入會投票ニ來ル會員ハ四五十名ヲ出デヌソデアルガ、蜂須賀侯ノ時ハ百名近クノ來會者ガアリ、各員悉ク立會人タル筆者ニ向ツテ本邦ノ處決ニ對シ慶福ノ言辭ヲ寄セタ。蜂須賀侯爵ノ先々代ハ佛國ニ公使ヲシテ居タカラ、其舊友トシテ來タ人モ多少アルシ、又駐佛日本大使ノ立會ニ表敬ノ意味モアロウガ、斯クノ如キ異例ナ多數ノ贊成投票ヲ得タノハ、決シテ此様ナ小サナ原因デハ無クテ、全ク帝國ニ對スル同情ノ現ハレニ外ナラヌ、之ヲ他方面カラ見レバ、聯盟デ執ツタ佛國代表ノ態度ヲ非議スル一端トモ云ヒ得ルノデ、帝國ニ對スル佛國

社交界ノ空氣ハ大凡之ニ依ツテ窺フコトガ出來ルト思フガ、四月六日筆者ノ晚餐ニ臨席シタ「ルブラン」大統領ノ口カラ聯盟決議ノ無策ニ付テ批評ノ聲ヲ聞イタ時ハ、誠ニ快心ノ極ミデアツタ。曾テ一九〇四年英佛協約ノ出來タ時、佛國ノ政界ハ英佛親善ヲ謳歌シ「エドワード」陛下巴里訪問時ノ盛觀ハ、當時外交官補デ同地ニ居タ筆者ノ記憶ニ未ダ新タデアルガ、佛蘭西國民ノ血ハ全ク別ノ方向ニ流レテ居タシ、今以テ「アングロ、サキソン」ニ眞摯共鳴シテハ居ラヌ、之ニ反シテ現時下院多數ノ空氣ハ假令如何デアルトシテモ、佛國民一般ノ抱イテ居ル親日氣分ハ到底之ヲ左右スルコトハ出來ヌ、唯誠ニ殘念ナノハ、目下ノ佛國トシテハ英米ニ追從外交ヲスルヨリ外ニ致方ノ無イ羽目ニ立ツテ居ルコトデアル。

日佛協約廢棄風聞

對日問題ハ往々佛國ノ内政々爭ニ利用サレルコトガアル、昭和八年春下院デ右黨所屬ノ「ド・タスト」氏ガ聯盟ニ於ケル佛國代表ノ態度ハ日佛協約ノ精神ニ悖ルモノダト云フテ政府ヲ攻擊シタノニ對シ、左黨系ノ新聞紙ガ該協約ノ廢棄意見ヲ書キ立テタ如キハ其好例デアルガ、五月九日「ボンクール」外外ハ閣議ニ日佛協約ノ廢棄ヲ提議シ「ダラヂエー」首相ヲ先頭ニ多數閣僚ノ反對ヲ受ケ、本件ハ不成立ニ終ツタトノ内報ニ接シタ、通報者ハ二人アツタガ、兩人共操觚界ノ大立物デ、情報ノ出所モ極メテ信賴スルニ足ル筋カラデアルカラ、筆者トシテ之ヲ聞流シニシテ置クコトハ出來ヌ、會々五月十五日海軍々令部長ガ帝國海軍視察團ヲ招待シタ晚餐會ニ、外務省極東局長「コスマ」氏ノ來會シタノフ幸ヒ、筆者カラ佛國ハ日佛協約廢棄ノ意嚮ヲ

有シ、閣議ニ上程サレタトノ噂ガアルガ、若シ之ガ事實ナラ由々シキ事ダト端的ニ質問シタラ、氏ハ全クノ初耳ダツタラシイ容態デ非常ニ驚キ、若シ斯クノ如キ重大問題ガ考慮サレテ居ルナラ、主任官タル自分ニ相談ノアルベキ筈ダガ、今迄少シモ聞イタコトガ無イ、詳細聞訊シテ御知セスルト答ヘ、頗ル興奮ノ模様デアツタガ、五月三十日筆者ノ晚餐會ニ來タ時、氏ハ先日ノ話ヲ政務通商局長ニシタ處、同局長モ知ラヌトノ事ダツタカラ、外相ニ面會シテ直接聞訊シタラ、此様ナ事が閣議ニ上ツタコトハ決シテ無イ、又斯クノ如キ考ヲ自分ガ抱イタコトモ曾テ無イカラ、自分ノ證言トシテ之ヲ日本大使ニ傳ヘテ吳レ、ト「ボンクール」氏ヨリ依頼サレタト告ゲタ。事ノ真相如何ハ暫ク措キ、本件ハ此證言デ一段落トセザルヲ得ヌカラ、深ク追求スルヲ止メタ。

以上ハ筆者ガ昨年春東京出發以來本年八月十六日巴里ヲ立ツ迄ノ一年半ノ間ニ取扱ツタ主ナ出來事ノ梗概デ長イ印度洋ノ航海中靖國丸船上デ執筆シ、歸京後之ヲ再閱淨書シタモノデアル。

昭和八年十一月末日

追懷錄 繢編 終

追懷錄 繢々編